

[コメント]

著者	千田 稔
雑誌名	東アジアの都市形態と文明史
巻	21
ページ	44
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	http://doi.org/10.15055/00002876

【コメント】

千田 稔

中国の都城の形態に特徴的にみられるのは、中心軸を骨格としていることであることは、よく知られている。王守春氏の報告にあるように、それは中国都市の伝統として、現代都市にも継承されている。

ここにいう中心軸の方位は、原則的に南北と考えてよく、古代・中世の都城に典型的にみられることも周知である。この南北方位の意味は、天空の世界を地上に投影したと考えられたのであって、おそらく北極星を宇宙の中心とみなす伝統的な道教思想との関連を無視することはできないと思われる。

しかし、同時に、中心軸をもつ都市の形態は、中国に起源するかどうかは、なお検討の余地がある。なぜならば、エジプトの都市を表現する絵文字は、円の中に十字を描いたものであり、さらにはローマの植民市も東西、南北の中心軸をもって都市の骨格としていることは、よく知られている。中国の長安城についてみても、たしかに南北の朱雀街が中心軸ではあるが、皇城に接する東西路も幅員が他の道路よりも大であるから、十字の中心軸の概念があったと想定できる。

中心軸と都市形態の問題は、今後、発掘調査によって中国における発生時期を究明することとともに、中央アジア・西域地方からインドにも視野を広げながら検討を重ねることが必要であろう。

そのようなことを考えると、四角形の都市をつくるという営為には、どうしても中心軸をもって都市の構図をつくりやすいという、一般的な行為も念頭におくべきである。そのような原則的な問題の上に、さらには中心軸の意味づけがなされていくものと考えられる。

都市の中心軸の問題は、中心軸が結びつく政治的権力の場との関係も無視しがたい。それは、東アジアの諸地域の古代・中世の都城をみれば容易に理解できるが、中心軸のもつ意味としての政治的権力ということができよう。

日本古代の場合、宮都は中国の都城をモデルとして作られるが、本来の日本における、優位の方角は、太陽信仰にともなう東西であった。それにもかかわらず、南北方位の朱雀大路を中心軸とする都市が出現したということは、文化そのものが中国の変容を強いられたことを示唆する。いうまでもなく、天皇の宮と南北の中心軸の関連である。また、日本の神社はもともと西から東に向かって拝礼するものであったが、古代以降、南から北に向かうような地理的変換をなすことも、都市の中心軸の影響といえよう。

王守春氏の報告において、興味深いのは現在の北京の都市計画にも言及している点である。北京という歴史的都市の再開発において、単に伝統的な建築のみならず、都市の中心軸をもつ都市のレイアウトも保存すべきだという意見が出てきたことに、関心をいだかせる。経済の成長期の過程にある中国の都市開発の行方が大いに注目される。

(国際日本文化研究センター)